
紅き金の軌跡

蜜柑汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅き金の軌跡

【Nコード】

N3166J

【作者名】

蜜柑汁

【あらすじ】

——そう、それは私が能力に目覚めるちょっと前。まだ身体に流れる”紅”を知らなかった、そして知った時のお話。今では地下に一人いるあの子の昔話。 ※捏造設定あり。一部流血・グロイ場面を含む予定です。苦手な方は回れ右!!

プロローグ（前書き）

オリキャラが割と出っ張ってます。（てかほぼオリキャラの構成です；；

それでもOKな方のみどうぞ↓↓

感想・アドバイス頂けると嬉しいですw

プロローグ

暗く冷たい空間。あるのはベッドと所々破れ、壊れた幾つかの人の形。それを照らすのは一本の蝋燭のみ。

此処は幻想郷のとある湖の側に聳え立つ紅魔館の地下室だ。

何百年。細かい所までは数えていないが、私はずっと此処にいる。この部屋を出入りするのには、食事を持って来る、そして片付けるメイドぐらいだ。

——いや、まだいた。

「うわっ」

いつの間にか開いていた上へと繋がる唯一の扉から、一人の人間がこちらに投げ込まれるかのように、否、投げ込まれたのだ。扉は勢いよく閉まる。

「いてて…」

「貴方が…新しい玩具…？」

定期的、という訳でもないが、こうしてお姉様が人間や妖怪を連れて来るのだ。

どこからなんて知るはずもない。というより、どうでもいい。

人間は私に気付いていなかったのか、私が話し掛けたら、驚いた様子でこっちを見た。

蝋燭がゆつくりとお互いを照らす。

人間は私の姿を確認し、ホッと息をついた。

「えっと、玩具…っていうのはつまり、貴方の遊び相手って事かな？」

「そう、…今度は…簡単には壊れない…？」

だって、簡単に壊れてしまうのでは、すぐに終わっちゃうから。

一瞬キョトンとした人間だったが、すぐにそれは困った表情に変わった。

「ん、それはちょっと難しいですね」

私の中の何かが崩れた。きっとこれが”期待”というものだったのだろう。

つまらない。だったら――、

「でも！」

突然声を強めた人間に、不覚にも私はちよつとだけ、本当にちよつとだけビククリした。

「僕、昔から話をするのは上手いって言われているんです」

言って、人間は得意気に笑った。

何でだろう。その時私は、ちよつとだけならいいかなって思った。



それから人間は、一つの物語を語り始めた。

最初は興味が無く、話半分で聞いていた私だったが、いつの間にか身を乗り出し、人間が発する言葉一字一句逃さず聞いていた。

正直自分自身驚いた。

「——と、まあこんな感じですよ」

その影響なのだろうか。

「私も：一つだけ話してあげる…」

あの話をしようと思ったのは——。

第1話 出会い

”吸血鬼”

幻想郷で最も強く気高く、そして美しい種族。ある時は幻想郷全土を支配していたとも云われている。
その存在は正に”誇り高き貴族”。

私の姉――レミリア・スカーレットが口癖のように言う台詞だ。

とはいってもものの、その”最強”と謳われた吸血鬼も今では私とお姉様の二人しかない。

え？他の吸血鬼？

そんな事長々と語るお姉様の話を右から左に流す私がわかる筈がない。

「――：フラン様！フランドール様！！」

メイド妖精の私を呼ぶ声が聞こえる。

だが、生憎呼ばれて出て行くほど私は素直な良い子ではない。

「ああ、出て来て下さらないと私が怒られるじゃないですかあゝ…
…」

涙目になりながら、再び私の名を呼び始める。
そして声は次第に遠ざかって行った。

「全く。そう簡単に私が見つかる筈ないじゃない」

そう言って、私は天井にぶら下がるステンドグラスから降りた。
勿論他に気配がない事を確認して。

端的にいうと、私は今脱走中だ。

勘違いはしないでほしい。ただ外に遊びに行くだけなのだから。

お姉様は私が外に出る事を禁じている。

何でも、私が（お姉様曰わく）外の汚れた空気や妖怪、人間に触れるのが嫌らしい。

お姉様は私を想っての事なのだろうけど、正直余計なお世話だ。

それに私は外の世界が汚れているとは思っていない。

そもそも私が気高く美しい種族の一人である、という自覚がない。
（それについてお姉様は五月蠅く言ってくるが）最強とは思いうけれども。

だから外に出るには必然的に”脱走”という形になるのだ。

誰かが来る様子はない。

私は外へと続く最短ルートを駆け抜けた。



闇の世界。月明かりが唯一の光――。

うん、やっぱり外は良い。

城内は美味しい物や綺麗な物は沢山あるけど、いつも緊張感…なのかな？――が漂っていて窮屈だ。

それに比べて外は何者にも捕らわれる事のない――正に”自由”

だ。

「さて、行きますか♪」



――、――。

森の割と人里の近く。
元氣な声。それも複数。

最初は興味本意で外に出た。そしてただなんとなくでさ迷っていた。だが、今はある事にハマっている。

「うし！じゃあいくぜ！！　じゃんけん――…」

「「ぽんっ！」」

それは人間観察だ。しかも子供。

どうやら最近夜に遊ぶという事に夢中らしい。

本当に人間、特に子供は面白い。考え付く一つ一つが、私が到底想像付かないものだ。

確かに弱っちい人間にとって夜の森はスリルがあるだろう。

当然ながら、親には無断のようだ。まあ、言ったとしても止められるのは目に見えている。

この前、こっそりと里を抜け出すのを見た。

きっと城を抜け出して来た私と似ていたからなのかもしれない。
それが始まり。

あれから数日。

この観察は、今では私の生活の中で、一番の楽しみとなっている。
私は子供達に気付かれないように、静かに木の中でも丈夫な枝に
腰を下ろした。

さあ、今日は一体何を見せてくれるのだろうか？

「わーい、美理^{みり}が鬼だー！」

じゃんけんの決着が着いたようだ。

鬼は肩よりも少し長めの黒髪を持った女の子。

「あ、ちょっと待って」

「何だよ美理。もう一回って言ってもダメだからな」

一人の男の子が待ったを掛けた女の子——美理に詰め寄った。

「違うってー！」

美理は頬を膨らまして言った。

彼女は丁度私の座っている木に駆け寄り、見上げた。

何故だろう…。

私に気付く筈がない彼女の双眸がしっかりと私を捕らえている気が
する。

そして彼女は微笑んだ。それは”可愛い”というよりも、
”おてんば”といった言葉を思わせた。

——誰に向かって？何の為に…？

「ねえ」

「！！」

一瞬誰に言ったのかわからなかったが、そんなの簡単だ。彼女が見ている方向には、私しかないのだから。

混乱中の私を気にする事もなく（というよりも気付いていないっぽい）彼女は続ける。

「一緒に遊ぼうよ」

予想もしなかったその言葉に、見開いていた私の眼は更に開く。だが、そんな事より私が気になったのは——、

「…な…んで…？」

いつから気付いてた…？

きっと彼女は私の言葉の真意を理解してはいないだろう。

彼女は一瞬驚いた表情になる。だがそれはすぐに笑顔へと変わった。

「だっていつもそこから見てるじゃん！」

「！！」

思わず息を呑んだ。

だって、城から抜け出した時、見つかったのはあの時——お姉様に見つかった時の一回きり。

そんな私が人間、しかも子供に見つかったのだから。それも最初からだったなんて…。

「そっ」

美理が声を張り上げた。勇気を振り絞るかのように。

「それに、見てるだけじゃつままないし…」

——私の中の何かが弾けた。

正体がわからないそれは、私の中で渦巻きながら、徐々に込み上げて来る。

「だ、だから……一緒に遊ぼう？」

美理が発した、少し緊張混じりの二度目の誘いの言葉。それと共に私に向かって差し出された彼女の右手。

「…うん！」

力強く頷き、手を取る。

それは、考える前に出た行動だった。

(これが美理との出会い)
ていたのかもしれない)

(今思えば、
私はあの輪が羨ましくて見

第2話 変化（前書き）

大変遅くなってしまって申し訳ありません；；

無事書き上げましたW

最後のほんのちよつとが三人称視点で書いてあります。

アドバイス・ご感想ありましたらお気軽にどうぞ！

第2話 変化

私の部屋に行く時、必ず通らなければならない通路が一つだけ存在する。

その通路に辿り着き、更に注意深く辺りの気配を探る。だがそこには、気配を探るまでもなく、聞き覚えのある二つの声。

「――で、フランは何処なの？」

「そ、それは…その…」

一つは苛立ちを隠す事をせず、威圧感たっぷりな声。一つは焦りに満ちた、今にも泣き出しそうな声。

私は軽く溜め息をつくとき、何でもないように二人の前へ出た。

「お姉様、私なら此処にいるわよ」

当然私に気付いてなかった二人は、突然の私の出現に驚いていた。だがお姉様のそれはすぐに、鋭い眼に変わる。

「フラン、貴女今まで何処に…」

お姉様は私が目を合わせようとしないうちにすぐに感じ取ったのだろう。言葉を途中で切り、そして――、

「外に行っていたのね？」

御名答。

さっきまで青ざめていたメイド妖精――私の世話係だ。――の顔

は、より一層青ざめる。

「お姉様は外に出ると汚れるとか言うけど」

けれど、素直に頷くのも癪だ。^{しゃく}

「偶には外に行って散歩でもしないとそれこそ体に悪いじゃない」

そこで、開き直ってみた。

だって、お姉様は自分の言う事は全てにおいて正しいか思っているに違いない。それが無性に腹立たしい。

「フフランドール！私は貴女のために想って――」

「私を想うんならほっといてよ！！」

いつもはそのままお姉様の説教が始まるのだが、私が大声を出した事によりその場の空気が一気に沈黙へと変わった。

「私、部屋に戻る」

この場から一時でも早く離れたかった私は、そう言って足早に自室へと向かった。

「……―！ ……人間の臭い……？」

お姉様がそんな事を呟いていたのも知らずに。



「もう、お姉様は何もわかってない！」

部屋に入るなり扉を勢いよく閉め、ベッドにダイブした。

何でお姉様は私を此処に閉じ込めようとするの！？そんなの押し付けに過ぎない！私を想うだって？笑わせる。私を想うのなら：

そこまで考えて、止めた。いくら考えたって仕方のない事。

私は小さく溜め息をつき、苛立ちを断ち切るように枕に顔を埋めた。

『また、遊ぼうね』

ふと別れ際の美理の言葉が頭をよぎる。次によぎったのはその時の彼女の笑顔だった。



木から着地。それと同時に誰かの短い悲鳴が聞こえた。

一瞬誰に対してのものか疑問に思うが、すぐそれは解決した。

”妖怪と人間は喰らう側と喰われる側”

一部例外もあるが。

いくら紅魔館からほとんど出た事がない私でもそれくらい知っている。

つまりは人間にとって妖怪は天敵、恐怖の対象なのだ。

私が着地した事により、それまで子供達からは見えなかった七色に光る翼が露^{あら}わになる。

それは彼女らに私が妖怪である、と理解させるのには充分過ぎるものだった。

子供達の顔が焦りと恐怖の色に染まる。ただ一人を除いて――。

「きれい…」

美理だ。

私の翼に目を奪われていた彼女は、今度は弾けるように身を乗り出してきた。

「貴女の翼、とってもきれいだね！ 私、美理って言うの。貴女は？」

彼女は眼をキラキラと輝かせている。

そこまでハシヤぐ事なのだろうか…？

「フ、フラン」

若干彼女の勢いに圧されつつも短く答えた。

「フランね！ あのさ――、」

「美理っ」

私の答えに満面の笑みを浮かべ、どんどん話していかうとする美理だったが、仲間によって遮られた。

彼女は首を傾げ、仲間達を見た。

「こいつ…ヤバいって」「妖怪だよね…?」「早く戻って来て」

口々に言う子供達。

それを見ると、思わず小さな溜め息が出た。

なんだかな。なんとなくわかってはいたけど…――、

「何言ってるの!!」

突然の美理の怒鳴り声。

予想外の事に驚いたのは子供達も同じだった。

「先生いつも言ってるじゃない!」人は見かけで判断しない”って!!」

わずかに沈黙が流れたが、仲間の内の一人――先程美理と言い合っていた少年がそれを破った。

「……いや、こいつ人じゃなくて妖怪だろ」

確かに。

「そつ、そういうのを”屁のカツパ”って言うんだよー!」

「それを言うなら”屁理屈”な。大体”屁”しか合ってるねーじゃん」

「う、うるさーい!!」

呆然とする言い合う二人を除いた一同。もちろん私も。だけど――、

「プッ」

「「プ？」」

突然の事に二人は声を揃えて私を見る。
もう抑えきれない。

「アハハハハッ」

面白過ぎる…！

私の笑い声を聞きながら今度は二人も呆然とする。かと思えば私につられてか笑い出した。そして残りの子供達も。



そこには既に”妖怪”も”人間”もなかった――。

思わず笑みがこぼれた。

早く明日にならないかなあ…。

私は待ち遠しさを胸に、明日は何をして遊ぼうかを考えながら眠りについた。



「まったく、これじゃあ私が馬鹿みたいじゃない」

時は早く過ぎるもので、現在月と星の明かりのみが照らす森。

フランの世話係を引き連れたレミリア茂みに隠れるようにしてそこにいた。

プライドが高く、普段からの行動からは到底考えられない紅魔館の主の姿に、世話係は少しの驚きと、そこから見える可愛らしさを感じていた。

「またまたあゝ。そんな事言ってお嬢様、本当はフラン様が心配で附けてた癖にい」

「う、うるさいわねっ」

レミリアの視線の先には唯一の肉親の姿が。詰まる所、二人はフランの後を附けてきたのだ。

はやし立てる世話係に対して、レミリアは凶星をつかれたようで、それしか言えなかった。

それを見る世話係の口は更に嫌らしい弧を描く。

「でも…」

不意にレミリアが呟いた。

『外へ行っていたのね?』『散歩でもないとそれこそ体に悪いじゃない』『私は貴女のためを想って…』『私を想うんならほっといてよ!!』

先日の出来事が蘇る。

何があの子を思ってた。茂みから見えるのは、今まで一番近くに

居ながらも一度だって見た事はなかった無邪気な笑顔。

それをこれまでことごとく潰していたのは――、

レミリアの思考はそこで止まった。否、止められた。

世話係が彼女の肩に、そっと手を置いたからだ。その手は優しく、暖かかった。

主は従者の顔を見上げる。従者はそれに応え、優しく微笑む。

言葉がそれ以上続く事はなく、二人はしばらくの間愛しの彼女を静かに見ていた。

（ただあの子を一番に想ってしまった事） （だけどそれは、あの子から一番大切なモノを奪っていた）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3166j/>

紅き金の軌跡

2010年10月11日16時45分発行